催眠感受性の規定因についての検討

臨床心理学専修　P11602　**小原　宏基**（指導教員　宮川治樹准教授）

【目的】

催眠を科学的・客観的に把握する前段階として，催眠感受性と関係があると考えられる要因について，探索的に検討することを目的とする。

【方法】

調査対象者：18歳から33歳までの43名(平均年齢：19.6歳，*SD*=2.7，男性：24名，女性：19名）に協力を得た。**調査時期**：2012年6月から8月の2ヵ月間で行った。**実施場所**：帝塚山大学学園前キャンパスの3号館4階基礎実験室にて実施した。**実施方法**：実験対象者に事前質問票（催眠状態イメージ質問紙，催眠態度尺度（清水，2009；清水・小玉，2001））を実施した後に，スタンフォード催眠感受性スケール（Weitzenhoffer & Hilgard，1959）の日本語版（斎藤，2004）を実施した。その後，事後質問票（特性的自己効力感尺度（成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田，1995），対人依存欲求尺度（竹澤・小玉，2004），DES-Ⅱ（田辺・小川，1992），MES（鈴木・木野，2008），没入尺度（坂本，1997），日本語版 Experiences Questionnaire（栗原・長谷川・根建，2010），多面的空想特徴質問紙短縮版（松井・小玉，2001），一般他者版成人愛着スタイル尺度（中尾・加藤，2004））を実施した。**実施時間**：上記に示した2種類の質問票と実験を合わせて2時間程度であった。

【結果】

スタンフォード催眠感受性スケールの得点分布を Figure.1 に示した。これを見ると，催眠感受性には3点のピーク値が存在しているように見受けられる。

①催眠態度（高・低）×自己効力感（高・低）の2要因分散分析を行った結果，自己効力感の高群において，主効果が有意に高いことが確認された（$F(1,39)=4.187$，$p<.05$）。②催眠態度（高・低）×道具的依存欲求（高・低）の2要因分散分析を行った結果，交互作用が有意となった（$F(1,39)=6.347$，$p<.05$）。そこで，単純主効果の検定を行ったところ，催眠態度の高群において，催眠感受性得点の単純主効果が有意となり（$F(1,39)=4.787$，$p<.05$），道具的依存欲求の低群において，催眠感受性得点の単純主効果が有意となった（$F(1,39)=8.963$，$p<.01$）。③主体性喪失期待（高・低）×自己効力感（高・低）の2要因分散分析を行った結果，主体性喪失期待の低群において，主効果が有意に高いことが確認され（$F(1,39)=5.166$，$p<.05$），自己効力感の

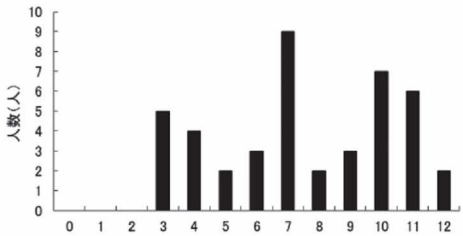

Figure.1　実験対象者の催眠感受性分布

高群においても，主効果が有意に高いことが確認された（$F(1,39)=8.756$，$p<.01$）。④主体性喪失期待（高・低）×見捨てられ不安（高・低）の2要因分散分析を行った結果，交互作用が有意となった（$F(1,39)=4.218$，$p<.05$）。そこで，単純主効果の検定を行ったところ，主体性喪失期待の低群において，催眠感受性得点の単純主効果が有意となり（$F(1,39)=5.038$，$p<.05$），見捨てられ不安の低群において，催眠感受性得点の単純主効果が有意となった（$F(1,39)=6.262$，$p<.05$）。⑤潜在能力解放期待（高・低）×想像性（高・低）の2要因分散分析を行った結果，交互作用が有意となった（$F(1,39)=4.856$，$p<.05$）。そこで，単純主効果の検定を行ったところ，想像性の低群において，催眠感受性得点の単純主効果が有意となった（$F(1,39)=5.583$，$p<.05$）。

【考察】

本研究は，催眠について科学的・客観的に把握する前段階として，催眠感受性と関係があると考えられる要因について，探索的に検討することが目的であった。

その結果，上記に示したように催眠感受性は3つのピーク値が確認でき，①催眠態度と自己効力感の2要因の分散分析で自己効力感の主効果に有意が認められ，③主体性喪失期待と自己効力感の2要因の分散分析で主体性喪失期待と自己効力感の主効果にそれぞれ有意が認められた。また交互作用については，②催眠態度と道具的依存欲求，④主体性喪失期待と見捨てられ不安，⑤潜在能力解放期待と想像性における2要因の分散分析において有意が認められた。

そのことから，催眠感受性得点分布に関係のある要因として，各因子の定義と比較しながら検討すると，実験協力者の催眠への関心とともに催眠により暗示される課題についての達成をしようと考える気持ちが呼応したり，実験協力者は自己観がポジティブであると自分自身の主体性を相手に任せても良いという気持ちが表れたり，実験協力者自身が自分について何らかの能力があると想像する傾向にあったりする場合にそれらが催眠感受性に強く影響を与えると考えられる。また役割理論に基づいた反応や催眠感受性尺度自身の特徴から来る影響の可能性も考えられる。

しかし今回の結果で考慮しなければならないことがいくつか存在する。まずは，実験対象者が少ないことである。今回の催眠感受性得点分布には見た目では3つのピーク値があるようにも思えるが，これが誤差であるのか，実際に起こっているものなのかを判断することは困難である。そのことから，実験対象者数を増やして再度検討する必要がある。次に実験対象者が全員心理学系出身者であったことである。このような実験条件であったことから，全体的に高値の催眠感受性得点が表れた可能性があり，結果に偏りが表れている可能性を考えなければならない。よって，分野ごとの検討も必要である。また今回実験できていない要因との関係も確認する必要があるため，今後さらなる追試験を要するであろう。

【参考文献】

アンドレ・M・ワイツェンホッファー，アーネスト・R・ヒルガード（1959），梅本堯夫，吉田 護 訳（1962），斎藤稔正 改訂訳（2004）：スタンフォード催眠感受性スケール，歯科心理学研究会

（おはら　ひろき）